

「異常を起こしている臓器・組織の神経支配、血管分布、筋肉・靭帯の起始・停止を考慮し、脈診、聞診、腹部打診などにより反応が出やすい所や、経験上反応の出やすい部位にポイントを絞って触診する」と谷岡先生が書かれていますが、最初の頃は反応点がわからない、わからないと迷い、ただ触っているだけだったように思います。

わからなければ患者さんに尋ねればよいのにそれができていなくて、ひとりよがりの治療になっていました。患者さんに尋ねて、たくさん情報を得ることが大事です。

現在は自分の治療院で患者さんに「ここ、どんな感じがしますか?」と尋ねながら、皮膚の状態と症状を照らし合わせて、指に覚え込ませるようにしています。

患者さんも「ああそこそこ、そこが痛いねえ。」と答えてくれるようになりました。

そして大事なことは施術前、後の皮膚の変化を確認することです。

すべて擦って確かめるのではなく、「腹部打診」、「脈」、「自覚症状の消退」を指標とし、これらが良い方向に変化していれば、皮膚も正常に近づいています。

谷岡賢徳先生が「ザラザラしたものや手を荒らすような薬品を素手で触らない。熱いものや冷たいものも素手では触らない。」と書かれてあるように家事をする時にはゴム手袋をするなど常に注意して、手を大切にしていきたいと思いません。

毎日が勉強です、わかるようになるまであきらめずに患者さんから学ぶという気持ちで臨床を続けて、温かく、柔らかなよい手を作り、指頭感覚を磨いていきたいと思いません。

参考文献

大師流はり研修会 谷岡賢徳論説集第1巻、2巻(大師流灸療院出版部)

笠律子

2007年 福岡柔道整復専門学校(現福岡医療専門学校)を卒業。鍼灸の資格を取得。

福岡県福岡市の笠鍼灸治療院で父と共に働いている。

臨床家育成会関西西塾、大師流小児はりの会九州に所属している。

恩書

高松文三

行き詰るたびに、「師匠がいれば」と思う。開業してから、三十五年近く経ち、毎日それなりに忙しくしてはいるものの道は遠いといつも感ずる。最近読んだ本の中に「道は学ぶものではなく、究めるものだ」という件があって、いたく感心したわけだが、そうなると益々もって道を究めるといのは困難に思えてきた。学んで済むものなら、自学自習は大いに心強いが、究めるとなるとどうなのか。既に「究めた」人、すなわち師匠と一緒に空気を吸って自然に身につけるのが最上のように思えるのだが、これは師匠を持たぬ者の幻想に過ぎないのだろうか。

とまれ師匠を持っている人を羨ましく思う。そういう出会いが自分にはなかったのだ。というか、いろんな出会いはあったには違いないのだが、そういう形で生かすことにはつながらなかったのである。絶望するしかないのかということでもない。先達の残した本がある。そんな数ある本の中でも、私が一番良く手にとるのは「図説深谷灸法」(入江靖二編著)だ。これは二十三年前に買ったものだが、未だに一番参考にすると思う。脈の話も、理論の話もなく、ただこれこれの病気にはここへ灸を何壮すえよという指示だけである。熟練者にはきつと物足りないだろう。初心者には有難い。理屈抜きだから。

単純なだけに強烈とも言える。例えば、膀胱炎の治療の箇所にはこう書いてある。「三陰交と絶骨の両側4穴の打ち抜き灸で多壯灸を原則とする。及び曲骨穴(又は中極)に二、三壯。これで治らないことは絶対はない。」この断言口調にどれだけ勇気付けられたことだろう。子宮筋腫でも「こぶしまで治癒可能」とある。実際これをこのまま信じて治療して、グレープフルーツ大の筋腫が消えたこともある。

どこを開いて読んでも、深谷先生の「大丈夫、やってみろ」と言う激励の声がする。それが聞きたくて未だにこの本は座右にある。私が、治療の七十%をお灸に負っているのはまったくこの先生のせいなのである。

しかし、「深谷灸法」でも間に合わない時がある。その時登場するのが「東洋医学見聞録」(西田 皓一著)だ。著者は内科医である。これは上巻、中巻、下巻と三部ある。副題として「初心者でも再現性がある鍼灸治療の実践」とあるように、言われたとおりにやるとたいというまくいく。時に面白いくらいに。しかも何故効くのかという問いに対して著者なりの解説があり説得力がある。著者は陰陽交叉取穴法、経筋療法、

奇経治療、於血療法などのテクニックを縦横無尽に小気味よいほど使いこなす。これほど東洋医学を楽しんでやっているのは、鍼灸師の中でもそんなに多くはないように思える。ある種の羨望すら覚えるが、よくよく考えてみれば、どのテクニックも、鍼灸師として使えないものはないわけだから、自分でも当然出来てしかるべきなのだ。この本に助けられたことは数多くあるが、特に記憶に残っているのはひどい蕁麻疹の患者さんのケースだ。病院へ行って薬も取ったが一向によくならず気が狂いそうになっていた患者さんだったが、西田先生のとおり治療をしたところ、何日も消えなかった蕁麻疹が翌日見事に消えて、たいそう喜ばれた。変わったところでは、歯槽膿漏の治療とか、イボ取りの治療もずいぶん参考になった。次女が虫垂炎になった時、マクロビオティック治療をする前にまず西田先生の虫垂炎治療を試みた。そして、確かに症状は和らいだ。そして何よりも手術なしでも直るのだという確信が持てた。確信が持てたのはやはり著者が医師であるという事実が大きかった。

この四冊があればまずたいのことは方がつく。保証します。そんな訳で、師匠はいないが、師匠に準ずる師匠級の本があり、これらは何とも有難く、自分にとっては恩書と呼ぶにふさわしい。そして、これらの恩書の助けを借りて、患者さんの体と格闘しながら、いつかこの道を究めたいと思う。

高松文三

1956年生まれ。言霊インスティテュートを1983年に卒業。2005年、ダラスのテキサス大学を卒業。ダラスで開業する。